
梅雨時期のベビードール

森本エリ

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

梅雨時期のベビードール

【Nコード】

N1697C

【作者名】

森本エリ

【あらすじ】

惣一郎は三十一歳の居酒屋経営者。二週間前に失恋したが、バイトの真夜のおかげであまり落ち込まずにいられた。二人は買いだしついでにドライブに行く。

今年は例年より入梅が遅かったらしい。

「なあ、惣一郎、お前最近はもうサーフィンしてないの？」

深夜一時。おれが経営する居酒屋『INDIAN SUMMER』に大学時代からの友達が来ていた。

六月中旬の雨が降る夜。

「うーん、店始めてから余裕なくなっただし、板は後輩に売っちゃったし」

そんなに繁盛店というわけでもないけれど、やはり店が終わってそのまま海に行く体力はない。それに店休日の月曜は買出しやら知り合いの店に顔出すのに一日が潰れてしまう。

「えっ、マスター、サーフィンしてたんですか?!」

意外だと言わんばかりにバイトの真夜が声を上げた。

「うん。中三の頃から二十三、四くらいまでね」

二十五の時に本格的に店をやるうと決めて以来ぱったりとやめていた。

「一年中海に入ってたよな、お前」

「うん。真冬はウエットの下に姉貴のストッキングはいてたよ」

おれの言葉に友達と真夜が笑う。

自分だつて穿いてただろう、と言おうとしたが、鼻孔をついた香りに気をとられた。

「へえマスターってインドア派かと思ってました」

真夜がいたずらっぽく瞳をしておれのほうを見た。彼女はもともと客で三ヶ月前に雇ったばかりの、おれより八歳年下の二十三歳で、生意気さも愛嬌になる女の子だ。

「そんなにたるんでるか？」

おれは自分の身体に視線を落とす。

「いいえ、そこまですって」

真夜は、くすくすと笑う。そしてごく自然に、何気なくおれの腕に軽く触れる。彼女にとつてはひとつの癖なのだろうが、おれは悲しいほど意識してしまう。柔らかいのに冷たい指先。

「そっぴや、惣一郎はまた一人なのか？」

友達がからかうように間に入った。「また」と言われるのがつらい。おれは三十一にして、まだ独身だ。周りが次々と結婚し、子供ができていく中で、おれは半年か一年そこらで振られてしまう。もてるから続かないんだとか、選り好みが激しいなど言われたりするけれど、そういうわけではない。

「理香ちゃんとはけっこう続いてたみたいけど」

「知ってて言うな」

二週間前に二年付き合った彼女に振られた。理由は、他に好きな人ができた。

もちろん愛していた。結婚も意識していた。今回こそはと思っていた。が。昼夜逆転のすれ違い生活とおれの性格が災いして振られた。仕方ないじゃないか。おれはどちらかといえば受身なのだから。実際、いいなと思う女にも自分から声をかけられないし、セックスのときも、相手が疲れているときに無理強いたくなく、その気にさせるような気の利いた真似もできない。相手がしたいといえばさせるし、行きたいといえば行かせる。嫌だといわれたらしない。

だから数合わせの合コンで知り合った男に持つていかれたのだ。

愛されている自信がない。淡白だから。いい人すぎる。そんな理由で女の子たちは去っていく。おれが何も言えず頷くと、さらに怒ってしまった娘もいる。女は難しい。

午前二時ごろ、友達はさんざんおれをからかって、真夜に今度デートしようねーなどテキストな事を言っただけで帰った。途中で入ってきたお客が二組、何杯かの酒と軽いつまみで過ごしていった。うちの営業時間は十八時から四時まで。三時半で今夜の客足は途絶えた。

「さて、閉めるか」

おれはカウンター越しの厨房からBGMだけが響く店内を眺めた。はあいと真夜が弾んだ声色で返事をして店先の照明と看板を消しに行った。

彼女が動くたびに揺れる淡い香水の香り。甘いのにどこか凜とした色気のある香り。ちよつと猫背の小さな後姿を目で追ってしまう。そんな自分が少し恥ずかしいのだが、理香と別れたとき落ち込みすぎないでいられたのは、彼女のおかげだろう。

しかし、彼女は従業員。おれは店長。彼女は二十三歳。おれは三十一……。くだらないことを考えている暇があったら閉店準備をしよう。

戸締りをして、駐車場へ向かう頃には四時になっていた。雨雲のせいで辺りは薄暗い。

「そついやマスター、ソルが切れちゃいましたよ」

微妙な売れ線のメキシコビール。あれが売っているのは片道一時間半のアメリカンスタイルの業務用スーパーまで行かないとない。

「まあ、そこまで急がなくてもいいけど……明日休みだし買いに行くか」

週間天気予報で今日は朝から雨だと聞いて、気乗りはしないが一日中寝ている気にもなれない。おれは独り言と溜息を漏らした。

真夜が赤い折りたたみ自転車の開錠をしてこちらを向いた。

「あそこに行くんですか？」

「あ？ あ、うん」

おれがそう答えると真夜の顔に好奇心が広がった。

「いいなあ！ あたしも行ってみたいです」

疲れもなくぱつと明るくなった表情に若さを感じる。

「連れてついでいこうか？」

「いいんですか?! ほんとに?」

「うん。けつこう面白いと思うし、ついでだから……」

そつえばちよつと前にその話をしたときにも真夜は興味津々

だった。隣ではしゃぎだした彼女を見ているとこちらまでいい事をしたような気になる。それに一人で行くよりはるかに気分もいい。

「じゃあ、絶対ですよ？明日何時に待ち合わせします？」

「んー、昼過ぎ……二時くらいはどうか？」

「はい！！ じゃあお店で待ち合わせでいいですか？」

「雨振るらしいから、家の近くまで迎えに行こうか」

「わーい！ ありがとうございます！！あ、今仲の交差点にあるドツキリ酒店知ってます？」

「うん」

「そこで待ってますね！！」

「わかった」

真夜は、徹夜明けには似つかわしくないほどの笑顔を見せ、じゃあ、また明日といって、折りたたみ自転車にまたがった。すでに雨が降りそうな気配だった。おれのミニバンに載せられそうな大きさの自転車だったので、送っていこうと言おうとしたが、真夜はペダルに足をかけて少し漕いだ。

「明日はマスターとデートだっ！ じゃあ楽しみにしてますね！」
振り向きざまにそう言われて、顔が熱くなった。上手く言葉を返せずにうろたえていると真夜は手を振って行ってしまった。

情けない……。自分を叱咤しながら、緩む頬を指で押さえる。

真夜は人懐っこく、ああいう冗談をあっけらかんと言える。だから常連にも人気があつて、すでに看板娘といわれている。なのにおれときたらあれだけの軽口でうろたえてしまった。

おれは車に乗って煙草に火をつけた。なんだか落ち着かなくなっていたのだ。

なんとなく眠れずに、目が覚めるのが遅くなり、約束の時間より少し遅れてしまった。

やはり雨は降っているし、肌寒い日だったが、真夜はおれを見つけた瞬間、満面の笑みを見せた。いつものようにボーリングシャツ

とジーンズという格好だったが、雰囲気違って見えたのは髪を下ろしているせいだろう。肩甲骨あたりまで伸びた髪は、いつもは結わえられて仔馬の尻尾みたいだが、今日は違った。小動物のようなマスコットの愛らしさより少しだけ大人びている。

「ごめん。寝坊した」

「全然大丈夫です。疲れてるのに無理言ってますみません」

真夜が、助手席に乗り込むとき、煙草くさい車内に濡れたアスファルトとあの香水の匂いが流れ込んできた。

「はい、どーぞ」

真夜から手渡されたのは、三枚のCDと、いつもおれが飲んでい
るブラックの缶コーヒーだった。

「あ、悪いね。ありがとう」

「ドライブみたいですでに楽しいです」

「あはは。なんだかねえ」

おれは彼女がドアを閉めたのを確認して車を出した。

彼女が持ってきたトラベラーズのCDをカーステに入れた。いつも
店で聴いている曲が始まり、なんだか落ち着いた。

車内では、クセあり客の話や店のメニューの話で、会話が途切
れることはなかった。業務用スーパーに着いても真夜がはしゃぎつ
ぱなしで、緊張もぎこちなさもなく楽しく過ごすことができた。お
れはソルのケースと塩クツキー、一人暮らしの彼女はアメリカ製の
大容量の液体洗剤と柔軟剤と漂白剤を購入して満足そうにしていた。
帰りはノリの延長で、海岸線をとって帰ることにしたが、雨が強
くなって、いくらワイパーを早めても追いつかなくなっていた。

「雨、ひどいですね」

少し不安げに真夜がフロントガラスを覗き込んだ。わきにコンピ
ニを発見して、おれはそこに寄ることにした。高速にのる大型トラ
ックに対応できる駐車場の広いコンビニだ。

「お腹空いてない？ コーヒーのお礼するよ」

「いいんですかあ？ やった！！ありがとうございます」

車から出るとあつという間に濡れてしまった。小走りで中に入つて真夜はベーコンチーズのブリトーと新発売のカフェオレを選び、おれはウーロン茶と沖縄そばのカップを買った。お湯を入れてもらっている、真夜が可笑しそうに笑った。

再び車内に戻ると、すっかり身体は冷えて暖かい食べ物ありがたいと感じた。

「沖縄そばのカップって見たの初めてですよ」

ブリトーを開けながら真夜はまだ笑っている。

「なんか美味そうだったんだよ」

照れ隠しに言い放ち、箸を割った。ふたを開けると蒸気とともに食欲をそそる匂いがあがった。

食事中は無言だったが、音楽と雨音が激しいせいで気にならなかった。ごみは袋に入れて、一休みをした。

「こんなに激しい雨の中でこうしていると、外が流れて世界がここだけになっちゃったみたいですね」

ぼんやりと外を眺めていると、真夜が呟いた。

「二人だけで世界に置いてかれたみたいじゃないですか」

そう続けた真夜はハツとしてはにかんだ。

「サムいですね。今の言葉」

真夜は肩をすくめたが、おれは『二人きり』という意識に囚われていた。

確かに雨のせいで視界が悪い。昔台風の朝一に海に行っていた時のことを思い出した。

そのとき友達が数人いた。車の中を密室だと感じることはなかった。雨の音より自分の鼓動が前に出たこともない。

「そろそろ、いきますか？」

真夜がおずおずとおれを伺った。

「……雨がひどすぎるからもう少し待っていない？」

おれがそう答えると真夜は少しの動揺をみせ、どもって承諾した。

「そ、そうですね、こんな嵐みたいじゃ運転できないですよね」「うん」

積極的な嘘をついたのは初めてだった。

このまま彼女に触れようなんてできるわけないが、もう少しだけ世界に置いていかれていたい気分だった。

「あ、これ新発売のやつ、飲んでみます？」

しばらくの沈黙に耐えられなかったのか、真夜が自分のカフェオレをおれに差し出した。

ストローから一口飲んだそのカフェオレは、甘かったが後味に苦味と香がしっかりと残った。

「マスターと間接キスしちゃった」

真夜がいたずらっぽく笑う。おれは年甲斐もなく照れさせられてしまった。

「ごちそうさま」

おれが笑い返すと、真夜が顔を赤くした。

雨は段々と止み、流れるように陽が差ししてきた。

「止むときは早いな。さて帰ろう」

ギアを入れ替えながら、梅雨明けはもうすぐかもしれないと思った。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1697c/>

梅雨時期のベビードール

2009年3月24日09時25分発行